

Contents

■特集「黒壁誕生20周年」	2～5 P
■シリーズ「道州制と1市6町合併」	6・7 P
■公共交通(デマンドタクシー・バス)	8 P
■企業誘致調印式、夜間受付変更	9 P
■後期高齢者医療制度、年金	10・11 P
■ほつとにゆーす	12 P
■長浜音楽祭、ポルトガル語教室	13 P
■不法投棄	14 P
■指定ゴミ袋配布、ゴミ収集カレンダー、駐車場	15 P
■交通災害共済、防災・防犯メール、火災予防	16 P
■児童扶養手当、入学祝い金、就学援助	17 P
■人権ってなあに、消費生活相談	18 P
■お元気ですか(高齢者との同居で気をつけること)	19 P
■生涯学習、ながはま学習塾、市民の声	20 P
■ぶんスポチャンネル(サンパレス講座)	21 P
■インフォメーション	22・23 P
■裏表紙 長浜城歴史博物館 特別陳列「お城の春はひな盛り」	24 P

今月の表紙

長浜に息吹く新しい文化。

写真は、窯から出てきた塊に、一つひとつ気持ちを込め、**生命**を吹き込んで作品を製作するガラス作家の**浅井千里**さん。

現在黒壁には、「吹き」(吹きガラス)「グラヴィール」(ガラスに彫刻する)「フィージング」(素材の違うガラスを載せて焼く)「ステンド」(金属枠にガラスをはめ込む)といった、それぞれ違う技術を持ったガラス作家が10人在籍し、日々新しい作品づくりに挑戦されています。20周年記念事業の一つ、新作発表会「リフレクションクロカベ・生命」では、これらの技術を融合した、長浜らしい作品を展示されます。

歴史と伝統、文化が息づく長浜から、未来へ向け発信されようとしている新しい**生命**を、みなさんも是非体感してみてください。

特集

黒壁誕生20周年

黒壁を中心としたまちづくりの軌跡



物

語のはじまり



人 4人と犬1匹からのスタート

現在の黒壁ガラス館は、明治33年に国立第百三十銀行長浜支店として誕生し、黒漆喰の外観から「黒壁銀行」と親しまれていました。その後、明治銀行長浜支店、銀行撤退後はカトリック教会へと用途を変え、一時は白壁の外観に変わります。

昭和62年、カトリック教会の郊外移転が決定、建物は解体の危機にひんします。それを聞いた市民の間から、長い間まちのシンボルとして親しまれてきた建物を保存しようという運動が起りました。

そこで、今後の中心市街地活性化の拠点として活用しようと、地元民間企業8社が3分の2、市が3分の1を出資して第3セクターの「株式会社黒壁」を設立しました。

株式会社黒壁が設立され

た頃、黒壁の前を休日の昼間の1時間に通ったのは「人が4人と犬1匹」でした。出資者全員が、こんな人のいないまちを再生できるのかという不安を抱く中、再生に向けた議論が幾度も交わされました。そのような中、ガラスに着目するようになったのは、初代社長である長谷定雄氏の「ガラスをやってみたらどうや」の一言からでした。

その後、1か月に及ぶ欧州視察や国内ガラス産地の動向を検証した結果、ガラスには、①歴史性、②文化芸術性、③国際性があり、人を呼び込む力があること、地元企業・商店街を圧迫す

年 間約200万人

ることがないことなどから、本格的に「ガラス館構想」が動き出し、平成元年7月「黒壁ガラス館」がオープンしました。

ガラス館オープン後、市民国際交流協会やながはまアメニティ会議の結成、北国街道町衆の会の発足など、市民主導の活動が広がっていききました。なかでも、700人以上のボランティアスタッフが支えた平成8年開催の「北近江秀吉博覧会」は、その後のまちづくりの大きな転換期となります。博覧会でコンパニオンとして活躍したシルバースタッフが、自ら「プラチナプラザ」を立ちあげたり、まちづくりの拠点としての機能を持つ「まちづくり役場」がオープンするなど、博覧会で提言された事業が次々と実現していききました。

秀吉博覧会を支えたボランティアスタッフ



長浜カトリック教会閉鎖当時

